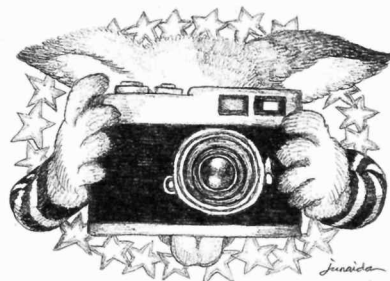


朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のプロローグ 29〉 junaida

うたをよむ 佐竹彌生と杉原一司

吉田 恭大

佐竹彌生という、私にとって同郷の、会ったことのない鳥取の歌人をしばらく読んでみる。一九八三年に五〇歳で亡くなり、長らく歌集の手に入りにくい歌人であったが、この五月に砂子屋書房から全歌集が刊行された。

帆の浮かぶさびしき海を歩まむと地にうすぎぬの靴を置きけり

川野里子は先行する山中智恵子と佐竹を対置し、戦後の「われわれ」という主語が困難になった後、激動の時代に奪

れた「私」を見いだそうとする動きの中で佐竹の歌は作られ始めたと言及する。秋に病みゆめさへ病みてしるじろとあかつき起きにつかふ歯楊枝

秋の歯をあてれば半滂沱たり泪たり梨、亡き人と食む

個人の生活体験を起点としながらも作品には通底する死の昏さがある。堂園昌彦が「覚醒と陶酔」の歌人と評する、生活と幻想が二重写しになったような稀有なバランスが魅力と言える。

また、同じく鳥取の歌人で言う二月には『杉原一司全集』が刊行された。鳥取大学の岡村知子氏らの調査研究の集大成と言える本書は、塚本邦雄や前川佐美雄との関係性と言ったこれまで語られてきた前衛短歌の文脈だけでなく、杉原自身の作品により広い視座を与えてくれる。陽に灼けて野えずに迷ふ一族のそのあとを行くわれと思へり

個人的には偶然地縁があつて知ることができた二人の歌集だが、それぞれ現在に再評価されるタイミグでの刊行であった。なるべく広く、新しい読者に出会ってほしいと願う。

(歌人)

三枝昂之著「百年の短歌」 佐佐木信綱、塚本邦雄、河野裕子、穂村弘、俵万智、大森静佳らの名歌105首を丁寧に鑑賞。「文学でありながら、文学をはみ出す詩型」である短歌の魅力を伝える入門書。(新潮社・1815円)

第30回若山牧水賞 宮崎県など主催。短歌結社「運河」代表を務める山中律雄さんの第6歌集「光園」(現代短歌社)が選ばれた。

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があり、郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週2回作品まで)。QRコードから。

佐佐木幸綱選

☆気がつけば朝はぐいっと腹筋で起き上がっているジムの成果だ (東京都 上田 結香)

週末を待って始まる芋煮会若き社員甲高い声 (厚木市 北村 純一)

ポケットに沖縄の砂混じり入るジパンはいて息子帰宅す (市川市 松丸 史佳)

他所よりの登山の客が激減す猛暑と熊のことしの夏は (宇陀市 赤井 友洗)

断腸の思ひで柿の木を切る熊警報に友は言ひたり (村上市 鈴木 正芳)

校門前Mの姿勢で踏ん張る子三年二組に行きたくなくて (金沢市 竹内 一二)

ちはやふる神と詠まれし立山を貫く隧道をパスはゆくなり (八尾市 水野 一也)

がんで瘦せ太りたいのにテレビでは瘦せるサブリの宣伝多し (宮崎市 太田 博之)

ゴミ出しはあなたの仕事と思つてた入院の夫に代わってゴミを出す (北九州市 大塚 久代)

亡き妻の新しい靴棚に満ち行ききたところか多かりしか (春日部市 池田 桐人)

【評】第一首、朝、ベッドで起き上がる場面、四句切れの採用、的確。第二首、芋煮会の季節。若い社員に焦点を当てた下句、うまく特色を出した。第三首、沖縄旅行の息子に取材して、ポケットの砂に焦点を当てたアイディア。

高野公彦選

復員の父待つ幼の心情を歌つたと知る「里の秋」三番 (神戸市 今井 修)

こし鮎とチョコと抹茶とレモン味もみじ饅頭じゃんけんする夜 (奈良市 山添 聖子)

五十年のいびきを妻に言い立てられ我が家も今日から連立解消 (大和郡山市 四方 護)

かくや姫のロマンもまぼろし月探査は資源争奪の危ふき孕む (高崎市 野口 啓子)

武器にさへコスバ、タイパは重視されいよいよ命は軽視されゆく (名古屋市長井 克宏)

盗みたる米を配りて村人を餓死より救ひし俠客ありき (安中市 岡本千恵子)

学校に行ける日本が大好きとヒジャブ外した女生徒が言ふ (西条市 村上 敏之)

八ッ橋の試食を口に運ぶとき緩帳が上がる京都の旅 (富山市 松田 わか)

☆気がつけば朝はぐいっと腹筋で起き上がっているジムの成果だ (東京都 上田 結香)

散歩道草ぼうぼうの家ありて主の婆の体調心配 (船橋市 佐々木美彌子)

【評】1 首目、確かに三番の歌詞は、椰子の島から復員してくる父を待つ、という内容だ。2 首目、色々なもみじ饅頭を家族でじゃんけんして分け合う楽しい光景。3 首目、連立解消したのは自民・公明だけでなく我が家も、というユーモア。

永田和宏選

法人化前の研究あるうちはノーベル賞も出るだろうけど (京都市 寺西 和史)

海坂藩の秋をさがしに旅に出る庄内柿の渋ぬける頃 (仙台市 沼沢 修)

恋に落ち今に至りし半世紀介護する今ふたたびの恋 (狭山市 若松 吉弘)

はほうほうゆめとつづつ結び目をしすかにほく鳩のほうほう (春日部市 宮代 康志)

赤錆びのビニールハウスの鉄骨に百舌鳥の来鳴きて秋も終焉 (五所川原市 戸沢大一郎)

食堂に一人席取るわびしさは入るをためらう理由の一つ (市川市 望月 美良)

吾に席を譲るを迷っているらしき若者の横をそとと離れる (新潟市 鈴木 秀子)

別れ際家に帰ると言つた父の亡骸だけを斎に戻す (京都府 片山 正寛)

連立を離脱されるかも知れぬやつぱり妻にやさしくしよう (海都市 樋口 勉)

いつかくる朝日歌壇投稿に必要になる「人間」の証明 (高松市 島田 章平)

【評】坂口志文さんとは京大再生研で十年一緒だった。嬉しく誇らしいことだが、国立大学法人化による基礎研究費削減は、寺西さんの詠うように、三十年先のノーベル賞受賞者ゼロを招来しかねない。九、十首目は「番外地」でも良さそうだが。

川野里子選

戦争の後遺症はありました。主治医の前で気を付けした父 (尼崎市 小石 絹子)

征くときも帰るときも死ぬときも百人単位の北の兵士ら (大和郡山市 四方 護)

百年も生きれば居なくなることを野薔薇に隠れながら話した (市川市 小林 蓮子)

ウィーンウィーン髪そりの音平和九十歳の夫まだ生きてる (町田市 高橋 澄子)

火葬場へ妻送りゆく霊柩車赤信号がしばらく止める (岐阜県 高岡 勉)

俺の影踏み付けながら歩く君ふらっと消えることを許さず (筑後市 近藤 史紀)

耳とがりが背にもまなこが 熊の来る畑にわれの進化はじまる (仙台市 佐藤 牧子)

掃除機の弱では吸えぬ砂粒がぐるりを囲む隠岐の島々 (流山市 坂本真衣子)

レスラーが気合で時間を止めているカウントスリーが確かに長い (和歌山市 岡田 信也)

コンビニで買ったおにぎり食べるため大屋根リングの下で車座 (松阪市 こやまはつみ)

【評】一首目、医者に症状を語るかのような口語が採られている。二首目、顔も名前も個性もない兵たち。三首目、人間は生きててもせいぜい百年。野薔薇だけが残るかのよう。七首目、熊の気配に全身が敏感になり別の生き物になってゆく。